

## 24. 肉牛の定時分娩誘起法に関する研究

大動物特殊疾病研究センター 石井 三都夫

メールアドレス mishii@obihiro.ac.jp

## 研究の概要

## 【目的】

黒毛和種牛においてPGF<sub>2</sub>α 15~20mgとデキサメタゾン 5mgの同時注射により24~36時間に84.9%分娩が誘起された。その分娩事故率は3.5%と低く、胎盤停滞も少なかった(4.7%)と報告されている(2005 相原ら)。本研究は相原らの方法にオキシトシンを加え、肉牛の定時分娩誘起を行い、母牛および子牛への影響を客観的に評価する。

## 【方法】

畜産フィールド科学センターにおいて飼養されている黒毛和種妊娠牛で、①妊娠日齢285日以上に達し、②乳房および乳頭が腫脹充実し、③子宮頸管の触診により3指幅以上の開大を認めないものに対して選択的に以下の処置を行った(自然分娩群:4頭、誘起分娩群:6頭)。PGF<sub>2</sub>α 20mgを筋注、同時にデキサメタゾン 5mgを皮下注する。翌日同時刻(24時間後)に子宮頸管の開大状況を確認後、オキシトシン 50IUを筋注する。分娩の状況や新生子牛の活力などを記録し母牛および子牛への影響を調査した。

## 【結果】

誘起処置を施した6頭のうち1頭が流死産となった。この1例は1回目の誘起処置の16時間後に胎子を娩出したが子牛はすでに死んでおり、胎盤は腐敗臭がした。処置前に流産していたのか処置後に死亡したのかは不明であった。誘起処置を施した他の5頭は誘起処置後5、27、30、34、38時間に娩出した。個体により誘起処置から胎子娩出までの時間は大きく異なっており、相原の報告と同様の結果が得られた。調査対象の10頭中胎盤停滞となった牛はいなかった。分娩難易度は両群間に有意な差はなかったが、誘起分娩群の2頭が牽引助産を要した(自然分娩群:0頭)。子牛の体重や出生時の活力スコア(可視粘膜、呼吸の安定度、反射など)は両群間に有意な差や傾向は認められなかった。誘起分娩群で流死産が発生したことから、より安全な処置の確立が望まれると同時に、処置から胎子娩出までの時間をさらに安定させる定時分娩誘起法の考案が必要であると考えられた。

